

ボランティア体験記⑭ ～ボランティアがおかれている現状について～

関西にボランティアをしている友人がいます。

個人情報になりますので、関西圏のこと、ということだけにしたいと思います。

彼女は五十代前半です。子供さんもおらず、これからの人生について色々と生き方を考えていたところ、絵の世界を通じて、ボランティアをしたいと思うに至ったそうです。

話を聞いていたところ、彼女が暮らしている地域といえましょうか、関西のあるところでは、なんでもボランティアさんにまかせよう、という動きが活発なところのようでした。

積極的に地域の人がボランティアをすることでお年寄りのケアに、ボランティアを介してつなげるという方針を打ち出しているとのことで、「ボランティア・コーディネーター」というセクションがあるそうなのです。

確かに地縁のつながりの濃いところ・村などは、有効かもしれないと思います。

苦勞しなくてもどこにだれがすんでいて現在どういう風になっている、ということに住民が普通に共有しているようなところでは住民がボランティアさんのようなものですので、専門性のある職員がいれば十分機能すると思うのです。

私はてっきり、彼女が福祉の世界を多少は知っていると思っていたので、はじめはよかったな、と思って聞いていたのですが、実際に現場に行くまでデイ・サービスがどんなところかさえ知らなかったというので驚きました。

お風呂にも入れるのね、というので本当に何も知らない人がボランティアをしている

現実に驚いたのです。

彼女は、お年寄りの介護予防の一環なのでしょう、「閉じこもり予防」と称して、その一端を担うボランティアもしていたそうです。

専門性が高い「介護予防」すら、「ボランティアさん」に丸投げしている現実がみえてきたので、しくみがどのようなものになっているのか尋ねたところ、その地域のシステムは次のようになっていました。

- 社会福祉協議会に、ボランティアの登録をする。
- ボランティアの要請が社会福祉協議会に、(施設などから)はいる
- ボランティア・コーディネーターが、マッチングをして調整をする
- 契約は、ボランティアと施設で行う。
- 契約の時点でボランティア・コーディネーターの役割は終了となる

ボランティアは「社会福祉協議会」とはじめに契約を行っているようなものですのでボランティアが足りないという場合はあいている登録者に「ボランティア」を自由にわりふることができます。

これは考えてみればとても危険なことです。

万一トラブルが発生しても契約は「施設」と「ボランティア」なので、社会福祉協議会は一切の責任を負わないしくみだということです。

きちんと認知症など「事前講習」などを行っているのならまだしも「何も知らない状態」のボランティアさんが何かトラブルにまきこまれたらどうなるのでしょうか。

施設もそうですが“責任の所在があいまいなまま沢山のボランティアさんが活動している”これが現状です。

また国は民間の力・ボランティアさんやNPO 法人の活用を推奨するようになりつつあります。

今後、彼女のようなケースやこのような自治体や市町村は増えるに違いありません。

また、ボランティア・コーディネーターという組織は「営業」のようなものだということも分かってきました。とても親切にはじめはサポートをするのでボランティアさんは感心して「とてもいい人だ」と思うようです。しかし本音は「やめてもらったらこまるので、ボランティアの人口確保」のための仕事だということです。しぶっていると

「あなたの力が必要なのです。とても評判がいいのですので是非」というトークを使いなんとか機能させようとしている

というのも彼女は絵を単発で教えているのですが、一度も「苦情」がないとブログで「絵」のよさをしきりにアピールしているのです。考えてみればおかしなはなしです。私は書道ですが必ず「飽きた」人はいるものです。半年やって、もう飽きたのでカラオケに行く、という人は多いです。

たしかに単発だということもありますが、好き嫌いはあって当然だと思うのです。私もためしに挑戦してみましたが、疲れてしまい簡単ですが不向きだなと思いました。

健常者である私でさえ絵にも向き不向きがあると思うのに「嫌だった」というお年寄りがひとりもない、ということとは？

どう考えても、あらゆる不都合な情報はボランティア側にはシャットダウンしているとしか思えない事情があるのではないかと思えるのです。

そういうことから、

関西圏のこのようなとある自治体のケースがモデルケースになり全国に広まると大変なことになる、と実感しました。実際彼女はとても疲れているようでした。しかし喜ばれ要請があると「無理してでもお役に立つなら、させていただく」という思考になっているようでした。

精神的に疲れてしまうのも当然です。

お年寄りに接したこともなく介護の経験や専門的な最低限の知識もないのですから気疲れは相当なものだと思います。

また際限なくランダムに要請がくる状態である。

今後このようなシステムが作られると結局しわよせは「市民」や「利用者」になってしまうのではないかと思います。

しかしボランティアさんは必要になってくると思いますので、“ボランティアの立場から施設と良好な関係を保つにはどうすればよい” 次の回で書きたいと思います。